書　評

Elsie B. Michie, *The Vulgar Question of Money: Heiresses, Materialism, and the Novel of Manners from Jane Austen to Henry James* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2011)

新井　潤美

題名が示すように、この本のテーマは 19 世紀イギリス小説における「裕福な女性」の表象である。このテーマに最初に興味を持ったきっかけとして、著者のエルシー・B・ミッチーは、序文において自分の体験を挙げている。母親が亡くなったときに、母が祖母から譲り受けた財産を遺してくれたということで、ミッチーはそれが自分の patrimony であったが、母から娘へと受け継がれてきたものなので、matrimony なのだと、冗談を言い、この本の土台となったいくつかの学術論文も、この逸話で始めたという（当時は学術論文を逸話で始めるのが流行っていたらしい）。ところがこの逸話のウケがよくなかった。口頭でこの逸話を話すと、聴衆は目をそらせ、落ち着きを失い、咳をしたりして、気まずさを表わす（ここでミッチーは、これが本当の embarrassment of riches だと、またもや冗談をとばすのであるが）。聴衆にとって、このようにあからさまに富の話をされるのは、はしたないことであり、ヴィクトリア朝の人間ならば vulgar と呼ぶようなことなのである。

ここでミッチーは vulgar という言葉について、現代では「富」よりは「セクシュアリティ／肉体」との関連で使われることが多くなっていると述べ、この本の最終章でダフネ・デュ・モーリエの *Rebecca* に触れる際にも、レベッカの vulgarity は 19 世紀の小説の裕福な女性の vulgarity、つまり成金的な趣味の悪さや品の無さではなく、性的な倒錯（いとことの情事）や堕落と関連づけられた vulgarity であり、vulgar という言葉の定義にもこのような変化が見えると言う。しかし少なくともイギリスでは vulgar は依然として、成金的な趣味の悪さとの関連のほうが強く、イギリ

スとアメリカにおける、富と階級に関する意識の違いが見られる。

しかしこのような細かい点はさておき、自分の富の話を聞いた聴衆の反応を見てミッチーは、裕福な女性を「悪者」とする現代アメリカの社会の風潮を考え、女性の富が不安、不快を喚起するのはなぜかと考え始める。

> This gender difference reflects what I argue here: that the distaste we feel for indelicate references to wealth and acquisition for their own sakes is more likely to be triggered by female rather than male figures and is most powerfully associated with rich women or heiresses. (p. xi)

ミッチーの目的はこのように悪者にされた裕福な女性の弁護や救済ではなく、ピエール・ブルデューが提唱する「象徴的」利益と「物質的」利益の区別に、ジェンダーがなぜ、どのように関わってくるかを考察することである。女性が手にした富にこそ、従来「富」に関連づけられる「悪いイメージ」——品の無さ、欲、俗っぽさ、過剰な消費等——がついてまわるのはなぜなのか。裕福な女性、あるいは女相続人という人物像をとおして、19 世紀の小説家はイギリスにおける経済的な変化と、それがもたらす様々な影響に対する不安と恐れを表してきた。自分の相続した遺産の話をすることによってミッチーは、聴衆にとってきわめて馴染みのあるナラティヴに身をおいたことになるのである。

ジェイン・オースティンからヘンリー・ジェイムズまで、様々な小説家を取り上げながら、ミッチーはその中の裕福な女性の表象を分析し、「貧しいが心の美しいヒロインがヒーローを射止める」という従来の marriage plot に新しい読みを提供する。さらに、その小説家と同時代の理論家を取り上げ、各時代における経済に関する思想や懸念がどのようなかたちで文学作品に反映されているかを考察するのである。

第一章ではジェイン・オースティンとアダム・スミスが取り上げられ、*Pride and Prejudice* において、ミス・ビングリーやレイディ・キャサリンといった裕福な女性は趣味の悪い、俗っぽい存在として戯画化されるが、*Mansfield Park* においては、メアリー・クローフォドはすでにカリカチュアではなくなり、人間としての魅力を持った存在として描かれていること

を指摘する。メアリーはミス・ビングリーやレイディ・キャサリンと違って、見栄や虚栄のためではなく、富そのものがもたらす安楽を求めるが、それこそが、アダム・スミスが懸念する、富が人に及ぼす魅力であった。メアリー・クローフォドを魅力的な女性として描写することによって、オースティンは富への欲望が一般的であるということを認め、バートラム姉妹と同様メアリーが「悪役」なのは、裕福なためではなく、その人格を形成するまわりの環境のためであることを示す。そして *Emma* においては、オースティンの唯一の裕福なヒロインは、レイディ・キャサリンのように、まわりの人間の生活に干渉し、結婚に口を出す傲慢さという欠点を自ら乗り越えることに成功し、裕福なヒーローと結ばれるのである。

テクストに密着してミッチーは、各章のテーマに沿って議論を展開していく。従来の marriage plot のこのような読み方は新鮮であり、鮮やかな手口とも言えるが、その過程で議論が少々強引になったり、テクストの細部が、作者の都合の良いように読みかえられたりするのは仕方のないことかもしれない。例えば、上に紹介したオースティンの章においても、メアリー・クローフォドはそもそも本当に裕福と言えるのかという、根本的な疑問が残るが、メアリーの財産や、彼女のおかれた経済的状況を分析することなく、彼女が裕福である前提で論が進んでいくのである。

このようなことが気になるのは、オースティンの作品が広く、また深く読まれる対象であるからだが、この本がまた興味深いのは、今はあまり読まれていない作家や作品が取り上げられている点である。第 2 章はフランシス・トロロップが、マルサスと industrialism との関係で取り上げられ、*The Widow Barnaby*、*The Ward of Thorpe-Combe* や *The Life and Adventures of a Clever Woman* といった作品が分析される。第 3 章はアントニー・トロロップとウォルター・バジョットであり、土地を基盤とする伝統的な冨が商業を基盤とする冨にのっとられることの不安と恐れが扱われている。第 4 章はマーガレット・オリファントがジョン・スチュアート・ミルと professionalism との関連で論じられている。アントニー・トロロップやオリファントはともかく、フランシス・トロロップの作品については、読者がそれらに馴染みがあることを前提にした close reading にはいささか強引なところがあり、プロットの説明などに、他の章とは別の新たな工夫が必

要であるように思われる。しかしまた、このような、今はそれほど知られていない作品への興味と読書欲をかき立てるのも、この本の魅力の一つである。

第 5 章はヘンリー・ジェイムズとゲオルク・ジンメルを扱うが、ここではジェイムズが従来の marriage plot を書きかえていく様が考察される。ジェイムズの登場人物たちはすでに marriage plot の存在を意識しており、例えば *The Spoils of Poynton* ではヒーローであるオーウェンの母親のゲーレス夫人は、息子が選んだ結婚相手が気に入らず、貧しい女性であるフリーダ・ヴェッチを marriage plot における、「善良な貧しい女性」と位置づけ、息子にもその見方を強いる。しかし結局オーウェンは「裕福な女性」であるモナと結婚し、marriage plot をくつがえすのである。

marriage plot を、イギリスにおける経済的関心との関連で読んできた場合、ジェイムズの後期の小説のヒロインがアメリカ人であることも、世界経済の中心としてアメリカがイギリスにとってかわりつつあったこととときれいに符号する。しかし、その次の、「後記」と題した章で、ミッチーは marriage plot が依然として読者に好まれ、ジェイムズ以降の小説にも使われ続けていることについて、自分はそれまでに marriage plot を、19 世紀小説における文学的手法として論じてきたが、同時に、アラン・バディウの言う configuration「配列」でもあると説明づける。配列は終わることなく、無限の組み合わせの可能性を持つのである。

The Vulgar Question of Money はあまり読みやすい本とは言えない。註の量も膨大で、その多くは、整理して本文に組み込んだほうが読みやすいのではないかとも思えるが、それは同時にこの本の情報量の多さをも示している。テクストの読み方や論の進め方に少々強引なところがあるのは前にも述べたとおりだが、イギリス 19 世紀小説の研究者にとって興味深い研究書である。